

染谷： レゼントをもらった時に、「ありがとう」と言えない。「こんなには」が言えない。それからお話を聞けない。お母さんたちが、子どもを好き放題に遊ばせて自分はおしゃべりに夢中になっている場面もたまには見られるんですね。そういうときに、お母さんたちに声をかけてあけたいんだけれども、直接的に言つたらきっともう来てくれないとと思う。じゃあどうやつたら「ありがとう」を言える子どもになるのか、やはり私たちが本当に「ありがとう、ありがとう」つていろいろな場面で言うようにしています。

それから、孫育ての支援活動もしているんですが、それをやって気がついた大きなことの一つは、紙芝居でも読み聞かせでも、おじいちゃん、おばあちゃんと一緒に来るお孫さんは、ちゃんと膝の中に座ってお話を聞けるんです。何にも言わなくても。お母さんたちの方は、なかなかそういうことができない。どうしてなのかなって思ったときに、おじいちゃんやおばあちゃんは、「紙芝居だよ」と言つたら私語は謹んでみんな紙芝居を聞くんですね。おじいちゃんやおばあちゃんに聞く態度ができているから、子どもたちもしっかりと聞くのかなって思うと、やはりお母さんたちにどんな言葉掛けをして、気づいてもらえばいいかということはいつも課題になり、すごく一生懸命やっているところです。



神谷： もし、シニア世代の方にご自分のお孫さんがいたら、どんどん口を出し手を出してもらいたいですね。それは、お孫さんにとって、おじいちゃん、おばあちゃんっていうのは、自分のできることとか、できるようになったこととか、作ったものとかをとても見せたい、知らせたい存在であるんですよ。

あと、本で読んだことがあるんですけど、母親っていうのは子どもに触れてから母親ができるって。なので、どんどん触れていくてやっと母親になれる。私もね、4人いてやっと言葉掛けが少しできるようになったかなって思っています。第一子を生んだお母さんって子どもにどうやって言葉掛けしていくかもわからないんです。でも、何人も育っていくと、もう知らないうちに言葉掛けしているんですよね。「はいはい、オムツ替えるよー」とか、普通に言葉掛けができるようになっているんです。今、何人も育てる時代でもないので、シニア世代の方が言葉掛けを教えてほしいと思います。さっきの叱るという意味もそうなんですが、叱り方もわからない、褒め方もわからないんですよ。声掛けの仕方がわからないことを前提で、周りの人たちが必要以上に声掛けをしてもらうといなって思います。

それは子どもに向けてもそうですし、お母さんに向けてもそうなんですね。それで肯定的な言葉とか、褒めてもらう言葉とか、励ましてもらう言葉を、お母さんにかけられると、お母さんたちはその言葉をそのまま子どもに返していくようになるんですね。すると「よかったです」「ありがとうね」「うれしいね」「ありがとうございます」そういう言葉を子どもたちも言えるようになっていく。なので若い世代のお母さんたちは、シニア世代の方はどんどんいろんな言葉を教えてもらいたいと思います。

漁田： ありがとうございました。時間がだいぶ迫ってきたようでございますので、最後に一言づつご意見をいただければと思います。

染谷： シニア世代の子育て支援について、一般論としてお話をします。子育て支援に関わるということは、今まで同じ地域に暮らしていてあまり口を利くきっかけのなかつた若い世代と、シニア世代との交流を生むきっかけになると思っているんですね。そのことは、お母さんたちがその地域で暮らす中で、安心して子育てできるセーフティネットの役割を果たせるだろうし、また若い方たちを地域の活動に引っ張り出すきっかけにもなると思っています。

それから、シニア世代同士もいろんな活動の中でつながっていく、单なる知り合いを超えた絆がそこに生まれてくる。地域のつながりが希薄化しているついでいる現代、住民同士が助け合うまちづくり、地域力の回復にも、シニア世代の子育て支援は大きな手になる。子育ての「社会化」は、シニア世代がどう動くかにかかっているという思いを強くしています。

もう一つ、シニア世代が子育てに乗り出す大きな意味合いは、自分にとって若さを保つたり、生きがいができる、いいことたくさんあるんですね。そのところも気づいてもらいたいなって思っています。生きがいの創出の場に子育て支援がなつたらと感じています。

神谷： 私たち新居町の高齢化が結構進んでいます。それで先日、ある活動に来たお父さんが言ったんですけど、お祭りの手伝いにいったそうなんです。それは地域で一軒につき一人出席しなければいけないから出たらしい。そのときにお祭りの旗を立てるのに、若い人がいなくて、30代半ばのそのお父さんが一番若かったらしいんですね。それで若いからって頑張つたら、あんたがいたからお祭りができるくらいなことをいわれて、とてもうれしかったそうなんです。なので、普段のそういう声掛けでも、あのおじさん褒めてくれたからうれしいなとか、あそこの何々さんのために頑張ろうかなっていうようになる。だから声掛けをしていただくと若い世代の活力になっていきますし、地域福祉とか、地域のコミュニティの活性化にもつながるかと思いますので、若い世代はいろんなことを教えていただきたいと思っています。その若い世代も教えていただく機会がないんです。なので仲良くコミュニケーションを取れるようになれば、いっぱいお話しいろいろなことを吸収したいので、どうぞ声掛けをみなさん地域の中でやっていただきたいと思います。ありがとうございました。

鈴木： お祭りの流れでいいますと、自分たちも地域でお祭りをやっていますが、とりえず何日お祭りだから来てよって声をかけてもなかなかきてくれない。居場所がないんですね。そうではなくて、申し訳ないけど何時から何時まであなたにはこの仕事をお願いしたいから是非来てくださいっていうと、一生懸命やってくれる。そうすると充実感、達成感があるもんだから、その後、本当に仲間になってくれるんですね。翌日も来てくれる。ですので、そういう居場所づくりとか、お願いの仕方だと思う。是非そういう活動を地域で広げていただければ、より場が広がるかなと思います。子育て中の親子は地域の方との交流を本当に求めていると思いますのでね、是非ともシニア世代の皆さんのが力をこれから地域で活かしていただき、よりよい支援ができるかなと思います。我々も行政の立場として、いろいろな組織、地区社協や自治会、またはNPOさんたちと協力しながら、一つでも二つでも前に進むように努めていますので、みんなで一緒に頑張つていきましょう。よろしくお願いします。

光司： 今日はね、こうやって話し聞いてると、行政は益々充実しているし、しっ

かりしたボランティア団体はどんどん活動の幅を広げていく。なんだか子育てしやすい世の中になったんじゃないですかって感じがするんですよ。ところがマスコミとかは、最近は子育てしにくくなつて、子育てにはお金がかかるとかね、口を開けばマイナスポイントばっかりカウントされるんですね。僕ね、それはまずいなと思う。

うちの母親が働いていましたが、僕らが子どもの頃、保育園なんかないです。どうしていたかっていつたら、うちの親父の母親、祖母が僕の面倒見るなんだけれども、ろくろく面倒見ないわけですよ。何を食つてたかって言うとね。うちは鶏を飼つてた、コーケーコココーコッコと庭を飛び回っているわけですよ。それが、毎日卵を一個産むんですよ。僕は、その産んだ卵を生のまま食わされていた。ずっとうちの母親知らなかつた。毎日、生卵ですから滋養強壮にはなりますよ。幼稚園にもいつてない子が、そんな栄養価の高いものばっか食べていたから、あるとき目から黄色い目やにが出始めた。卵の黄身ですよ。これで医者に連れて行つたら、何を食べさせてんだって聞かれて、うちのばあさんに聞いたらびっくりしたという話もあるわけですよ。

実は僕が子どもの頃は、こんなに子育てがしやすい時代じゃなかつたんです。働きながら子育てをやつたら大変ですよ。僕に昭和27年生まれの5歳上の兄がいます。あの頃、うちの母親はおっぱいが出なかつた。夜中にうちの兄貴がわーって泣いていると、まず七輪で火をおこします。で、お湯を沸騰させます。それから粉ミルク、ほ乳瓶の中に入れて、沸騰したお湯を注いで、人肌まで今度は冷ます、1時間たちましたよ。で、ようやく飲ませるわけですよ。その粉ミルク代が、今のが値段と同じだつていうわけですよ。いかに昔高かつたか。要するに、子育てには金がかかつたし手間もかかつた。今だったらボット出して押せばお湯が出る。それからお湯を注ぐだけの離乳食もある。

みなさんね、今、昔に比べたら子育てはしやすい時代になったことの意識も、このようなシンポジウムがあつたりして高まつているわけです。これをアピールしなくちゃいけない。今回のテーマは一つ決まりましたね。僕も講演でしゃべつたように、上の世代の大人たちが学校の先生をはじめとして、褒められた、豚も木に登つたわけですよ。今度、我々シニアになつたら何をやるかっていうたら、やっぱりうまい言葉掛けをして、さらに若い世代のお父さんお母さんに、なんか勇気を与えたいなって。

今の若い人たちはみんな相当ね、優しい。ただ、足りないのはね、勇気じゃないかなと思う。やさしさというは人間の基本だと思っている。ただ勇気のあるなしによって、そのやさしさを表現できたり表現できなかつたりするんですね。だから僕は、子どもたちに持つてもらいたいキャラクターの一番大きいものが勇気だと思う。もう君たちは十分に優しいんだよ。そして勇気を持て。勇気を持つたら君たちの優しさに羽が生えて大きな表現をすることができる。ところが、勇気を与えるのがまた難しいんです。さあみんなで勇気を出そなんて標語を書いたところで、勇気なんてどこからも出でこないですよ。それは、人間と人間との関係であるとか、人間とぶつかったり人間とコミュニケーションとつたりとか、人間とのつながりの中でしか、その人間の中での行動、体験を通してしか勇気は絶対身につかない。こういったネットワークのつながりの中で、いろんな世代の人間と子どもたちがぶつかり合つたり、学んだりすることや、このようなネットワークの中から大きな勇気を持ってもらいたいなと思う。勇気があつたら、何ができるかといったら、新しい領域に新しい一步を踏み出すことができるんですね。この力を与えるために今日の一つの

キーワードといつたら、褒めるということを活用しながら僕は子どもたちに勇気を与えたなと考えている。

染谷： シニア世代も先ほどお話をしたように、子育て支援に参加すれば日々の暮らしにメリハリができますし、気持ちが若返りますし、自分が必要とされているという喜びも感じられる。お母さんたちにとって、子どもたちにとって、シニア世代にとっても、みんなよくなる三方良し、トリプルハッピーになる方法だと思うんです。ですから、今日神谷さんからたくさんの具体的な例を挙げていただき、お母さんたちはシニア世代の応援をほしがつて、だからそのニーズに答えてほしいんだってことがわかりました。私たちは、どんな支援をしていいのかわからなくて躊躇していたけれど、一步踏み出すことによってつながつていただける。地域の中でそういう新しい関係が広がつていけば、ずいぶんと暮らしやすくなる。生まれたときからずっとその子を見守り続けてあげられる地域になつたら、お母さんたちが安心して子育てできる社会になつてく。今日はたくさんのお気づきと励ましをいただきました。

漁田： このパネルディスカッションを始める前に、帰るときにはこういうことくらいはできそうだなと思ってお帰りいただきたいって申し上げました。もしもボランティア登録したいとかいうことがありましたら、この袋の中にA3の大きな裏表の紙がございます。そこをたどつていくといろんな団体に行き着くことができますから、子育て支援してほしい側も、したい側も、ここを探してください。あるいはこの5人にお申付けください。

それから、登録はちょっとハードルが高いよという方には、ちょっと30秒だけ世間話を。今日は私、浜松駅新幹線を降りてトイレに行ったんですね。そしたらトイレが大変混んでいて、行列ができていたんです。女子トイレの片隅に2歳前後の男の子が下半身脱がされて、子どもはえらいこつたっていうような顔をして、お母さんの肩のところにこうやって覗いている。お母さんはしゃがんで子どものパンツを替えていたんです。人が邪魔そうに通るたびにお母さん、「すみません、すみません」ってもう本当に肩の狭そうな顔をして謝っている。私、いつものとおりお母さんに声をかけようと思って、「かわいいね」って言つたんですよ。脈絡とまったく関係ないんですけど、そしたらお母さんの顔がぱつとこう明るくなつたんですね。子どもはお漏らしもする、大泣きもする、迷惑もかけるけど、みんなそんなこと思つてないよ、みんなお互い様だよっていう気持ちを「かわいいね」の一言だけ伝えられるのは、鈴木先生がおっしゃつた「褒める」ということと同じこと思つるんですね。きっとそのお母さんは、私の「かわいいね」を聞いて、自分がいっぱいいっぱいの子育てが終わつた頃、誰かにきつと「かわいいね」と言ってくださるだろうと思っています。これが、地域の子育てなんじゃないかなと私は思つて。今日の四方のお話をお聞きして、その気持ちを強くいたしました。というわけで、時間ぴったりでござります。これで今日のシンポジウムを終わらせいただきます。どうもありがとうございました。